

一つ目のハードルを越えた福田首相の訪中

2007年12月

支持率低下に悩む福田首相は、今回の訪中で、今年をどうにか無事に終えるめどを得た。もともと、成功を収めるであろうことは十分予想できたところではある。

なぜなら、「世界の中の日中関係」という崇高な理念にもかかわらず、日中関係の政治的基礎の強弱は、その時々日本側政治指導者の歴史問題に対する姿勢如何によって大きく影響されるのが現実だからだ。その点、異例の厚遇に象徴されるように、「靖国は参拝しない」と明言する福田首相に対する中国側指導部の信頼度は極めて高い。首相が官房長官時代に訪中した際の一連の会談で、両者の間には既に一定の信頼関係が構築されていたのである。また、4月の温家宝中国首相来日時にうたわれたいくつかの課題のうち、日中ハイレベル経済対話の開催、中国艦船の来日、日本米の中国輸出などが既に実現していた。

これらを基礎として行われた今次訪中の最大の成果は、「戦略的互惠関係」の構築という日中関係の新たな枠組がさらに強化されたことである。

まず、「両国指導者の頻繁な往来」が実現した。相互訪問が重要な意味を持つのは、事務レベル協議の行き詰まりも、指導者の直接対話によって政治決着が図られる可能性があるからである。継続協議となった東シナ海のガス田開発をめぐる問題の早期決着も、来年「桜が咲く頃」の胡錦濤国家主席来日がなければその可能性は低いと言わざるを得ない。来日が期待される所以である。

戦略的互惠関係を支える大きな柱は両国国民の相互理解であり、相互信頼であるが、現在の日中関係にそのような柱が存在しているかは、残念ながら疑問なしとしない。その意味で、北京大学で行った講演で、過去の問題に関して福田首相が「反省すべき点は反省する勇気と英知」の必要性に言及し、また、ウイットに富んだ対応を見せたことは、草の根レベルでの対日感情改善に資するであろう。過去の侵略に対する日本側の謝罪について「積極的に評価」し、改革開放に対するわが国の支援を「永遠に忘れない」とした温家宝首相の国会演説とあわせ、息の長い地道な作業の第一歩を双方が踏み出した。

ところで、「日本は中国に妥協しすぎる」との声をしばしば耳にするが、筆者はそうは思わない。日中関係の発展は双方の妥協の結果によるからだ。安定した日中関係は中国にとっても必要不可欠なのである。それは、現政権が掲げる「調和の取れた」経済成長のためには、日本の高い技術力と経済力が引き続き必要であるという実利的要請による。また、全方位外交を進めるためには画竜点睛を欠くわけにはいかないという理念的側面もある。さらには、日中関係の悪化をきっかけとして、大衆の不満が共産党政権に向きかねない（例えば、05年の「反日」デモ）という死活的問題もあるからだ。中国側は、福田首相在任中にできる限り関係を改善し、発展させたいと考えている。

訪問を無事に終えた福田首相の次の対中課題は、北朝鮮問題や気候変動問題など二国間関係を越えた分野で、わが国の国益を守りつつ協力を進めることにより、目に見える形での国際貢献を行い、それらを原動力としつつ、来年を日中「飛躍の年」にすることである。